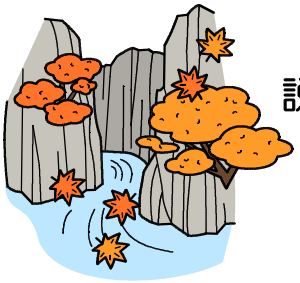

説教要旨「目からウロコがこぼれ落ち」

使徒言行録９章１～１９節ａ

「イエスは救い主である」と信じる人々を迫害していたサウロは、さらに迫害の手を広げようとだますこと言う町に向かっていました。その途上で彼は、突然の天からの光に撃たれて、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」との天からの声を聞きます。そしてその声は、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と名乗ったのです。

これまでサウロがキリスト者たちを迫害してきたのは、「イエスこそ救い主だ」と吹聴する者たちを滅ぼすことこそが神の御心だと確信していたからです。だからこそ彼は、神の敵であるキリスト者なんていくら殺しても平気でした。しかし天からの声が、「わたしはイエスだ」と名乗ったことでサウロは、自分がこれまで行ってきたことを正当化する根拠を失ってしまいました。神の為にと言いながら、本当に神に従っていた人々を迫害し、殺し回っていたのです。自分の行いの過ちに気づかされ、その計り知れない罪に押しつぶされそうな中で、サウロは視力を失いました。まさにお先真っ暗です。自分がこれまで信じてきたものがすべて崩れ落ち、そのあまりに大きな罪を贖う道など見いだせず、自分の生きる価値さえ認められずに、食事もとれなくなったのです。

自分の過ちを認めると言うことは、本当につらいし苦しいことです。その罪が大きければ大きいほどに、こんなに大きな罪が赦されるはずがないと思えるからこそ、過ちを認めることが恐ろしいのです。けれども、赦されない罪などありません。自ら十字架にかかられたイエス様が、「父よ、彼らをお許しください。自分が何をしているのか知らないのです。」とわたしたちのために祈り、神様に取りなしてくださったからです。

取り返しようもない罪を突きつけられ、お先真っ暗、自分自身に生きる価値さえ見いだせなくなっていたサウロが、それでも赦されて、視界が開けて、自分が生きる道を示されました。イエス・キリストの十字架の意味が示され、サウロが救われた出来事、それが「目からウロコが落ちる」という出来事なのです。

（２０２１・１１・７　説教者：稲垣真実）